



みみだより

松江ろう学校 支援部

No. R2-3 2020. 11. 2

木々が色づき始め、秋が深まってきました。

今号では、「日常生活に役立つ機器の紹介」「中学部の自立活動の紹介」「手話について～私の学生時代を振り返って～」をお伝えします。

日常生活に役立つ機器を紹介します！～時計編～

今号では、目覚まし時計と振動腕時計を紹介します。様々なメーカーから販売されているので、機能やデザインから好みのものを選ぶ楽しみもありますね。

強力バイブレーションの目覚まし時計

枕の下や枕カバーの中に入れて使い、強力なバイブレーションで起きることができます。



ベルマンアラームクロック + ベッドシェーカー

目覚まし時計としてだけでなく、一般電話回線につなげることで電話/FAXの着信も感知できます。



ソニックシェーカー

☆金子先生愛用品☆

枕カバーの中に入れて使っています。布団の下に入れても響きます！



フルフルクラッシュ (ADESSO)

スマホよりも強力な振動で目覚めをサポートします。



バイブレーション機能がついている腕時計



スポーツウォッチ (GARMIN)

☆石田先生愛用品☆

ランニングのために買いました。買った後でアラームのバイブレーション機能があることがわかり、早く起きる時に使っています。スマホと接続できるのでLINEの着信なども振動でわかります。



インスタリンク ウォッチ

スマホとBluetoothで接続して、アラームや電話の着信、SNSの着信を振動とランプで教えてくれます。



バイフラライト mini

女性や子どもに最適な大きさ。アラームやカウントダウンタイマーを強力な振動で知らせてくれます。白、黒の他にポップピンクシャワーやストロベリーピンクなどカラフルなものもあります。

※日常生活用具給付等事業により、日常生活用具対象品は、各市町村が認めた場合に自己負担額が決定されます。

中学部の自立活動の紹介

学年ごとに今年度の取組の中から紹介してもらいました。

3年生

浜田ろう学校の3年生1名と本校の3年生2名で交流をした時に話し合い活動をしました。「高校生になること」「聞こえにくさがあること」「将来社会に出ること」等について話し合い、同じ悩みをもつ者同士の、普段聞くことができない心からの言葉を交わし合い、大変貴重な機会となりました。最後の感想では「誰にも言えなかったことを話すことができて心が軽くなりました」「まだ心に不安があるけど、この話し合いを生かして自分らしく生きていきたい」という言葉が聞かれ、お互いに自分と同じような思いをもつ存在を知り、それを支えとすることができたようです。



2年生

騒音計アプリを使って、生活の様々な音を調べました。机を引く音、ロッカーを閉める音、自分たちの声、筆箱を閉める音、スイッチを切る音など、普段は気にしていなかったものも意外に大きな音を出していることが分かりました。生徒たちは、「防犯ブザーが何dBかを初めて調べました。大きい音で『へえ〜!』と思いました。」「大声を出すと隣の人に迷惑をかけるかもしれないので、自分で考えて判断することが必要。」などの感想を書きました。

1年生

自分の聞こえを理解し、他者に伝えられる力を付けるために、これまで次のような活動に取り組みました。

- こんな自分になりたいなあ

好きなこと・苦手なこと
できるようになりたいこと
将来の夢

- 自分の聞こえを知ろう

自分の聴力
耳の構造とその役割
日常の音や声の大きさ
障害者手帳 等

- “伝える”力を鍛えよう

情報伝達ゲーム わかりやすく説明しよう

「言葉にすることは難しい」「高音が聞きとりにくいことが表からわかった」などの感想がありました。自分を知り、自分を磨く時間になることを心がけています。

手話について～私の学生時代を振り返って～



本校では教職員の手話力の向上を目的に、毎月1回手話学習会を行っています。8月の手話学習会では、廣戸先生の体験談を聞きましたので、ここで紹介します。

私が物心ついた頃（昭和40年代前半ごろ）、“手話”は“手まね”として扱われていて、教員には「手まねはやめましょう」と言われることが多かったです。また、手話を使うと日本語力が落ちると考える教員も少なくなく、授業で手話を使用する教員は数人しかいませんでした。また、授業方法は板書されたものを写すというものがほとんどで、教員は生徒に背を向けていることがほとんどでした。

昭和40年代後半になると、“手まね”は“手話”として認識され、徐々に手話が普及してきました。その頃、指文字は一般的ではなく、手話で伝えることができない外来語などは空書や筆談で伝える方法が主でした。初めて指文字を見た時は、新しいコミュニケーション方法を知ることができる嬉しさでとてもワクワクしたことを覚えています。

中学部に入った時、職場見学で先輩たちの手話を見て、手話も言語の一つだと考えるようになりました。手話を学べば学ぶほど手話の楽しさや必要性を実感しました。

高等部に入ってからは、手話の使用をカリキュラムの中に取り入れられるよう教員に訴えましたが、認めてもらえませんでした。国語や数学などの教科と同じように手話が位置づけられるといいなと思っていましたが、なかなか難しく諦めました。

ろう学校での手話の捉え方は、様々な変遷を経て現在に至っています。廣戸先生が望まれたように手話が教科にはなることは叶っていませんが、現在ろう学校では、きこえない人の大切な言語として手話が使われるようになりました。このような手話の歴史を知っておくことも大切ですね。